

UCSDにおける研究活動

大洞 公平 准教授

えています。でなければ、その教えを受ける学生のグローバル化も歪んだものになりかねないでしょう。その意味で、UCSDにおける研究活動が、私自身、また、学生諸君のさらなるグローバル化に少しでもつながればよいなと思っています。

私は、2015年9月から10か月余り、University of California, San Diego (UCSD) の School of Global Policy and Strategy (GPS) に滞在し、行動経済学、組織の経済学に関する研究を行いました。主たる研究テーマは、インセンティブと組織構造に関する行動契約理論研究です。また、そこから得られた理論的帰結を実験によって検証する研究に向けた準備も行いました。GPS 以外に、Department of Economics や Rady School of Management にも私の専門に近い研究者がおり、そこで行われている講義やセミナーに参加しながら研究を進めました。以下にいくつかの例を挙げておきます。

まず、以前から進めていたチーム・インセンティブと損失回避に関する理論研究の結果を検証する実験デザインを考えるために、C. Sprenger の講義 (Behavioral Economics) に参加し研究計画を作成しました。損失回避を考慮した場合、失敗に対しても報酬を与えることが効率的になるケースがあるという理論結果の

妥当性を実験で検証することが目的です。次に、組織におけるミドルのリーダーシップの役割に関する理論研究を進めるとともに、その結果を検証するための実験デザインを J. Andreoni の講義 (Experimental Economics) を通して考え、研究発表を行いました。そこでのロジックは公共財の自発的供給にも応用可能で、その分野に新たな貢献をもたらすことを目指しました。他にも、J. Sobel の講義 (Advanced Microeconomics) に出席し、情報伝達やそれに伴う嘘や欺瞞に関する研究を学び、組織不正に関する研究を始めました。

私にとって留学は、研究者として生き続けるための修行の機会です。最前線で研究している優秀な研究者と渡り合うことは相当なエネルギーを使い、楽しいことよりも辛かったり悔しかったりすることの方が多いです。しかし、大学のグローバル化が声高に叫ばれている今、教員もグローバルに研究活動を推進し成果を出すことがより一層重要になってきていると私は考

